

三神 弘子（早稲田大学）

アイルランド演劇を専門に研究している関係で、私はアイルランドのダブリン大学に留学した。アイルランドに留学した話をすると、「アイルランドの英語はちゃんとした良い英語なのか？」と尋ねられることがある。留学先が例えばイギリスやアメリカだった場合、このような質問はされるのだろうか。

ここで、イギリスとアメリカというように二つの国を並列させて述べたが、この二国で話されている英語に関しても、日本にはヒエラルキーのようなものが存在している。きちんとした英語を学びたいから、アメリカではなくてイギリスに行きたい、といった素朴な信仰告白が頻繁に聞こえてくるのである。さて現実はというと、イギリスでBBCのアナウンサーやロイヤル・ファミリーの話すような英語を耳にすることは稀である。ロンドンでコックニー訛りに当惑したという体験談はよく聞かされる。結局、ある一人の人間が話す言語は、その人の国籍や住んでいる場所によって規定されるのではなく、その人の教養や受けた教育と大いに係わっている、という誰でも気がつく当たり前の結論に行き着くわけだが、それでも「クイーンズ・イングリッシュ」信仰のようなものが根強く生き残っている根拠はいったいどこにあるのだろうか。

わたしたちは、英語という言葉を学ぶ時、言葉だけを学ぶのではなく、その言葉の使い手の文化も一緒に学んでいる。明治以降、日本はイギリスから英語を学んできたが、イギリスの英語を学ぶ際、イギリス人の物の見方や世界観ばかりでなく、彼らの独断や偏見までも一緒についてくる。戦後、中学校や高校で教えられる英語はアメリカ英語であるし、日常的に目にし耳にする英語も圧倒的にアメリカ英語が多いにもかかわらず、いまだに「クイーンズ・イングリッシュ」信仰があるというのは、この明治以降学び続けたイギリス英語におまけでついてきたイギリス的独断—アメリカ英語は植民地の英語という宗主国の意識—がいまだに息づいているということなのではないか。「クイーンズ・イングリッシュ」と「アメリカン・イングリッシュ」を比較して優劣をつけるような行為は、ある意味でたわいないことかもしれないが、わたしたちは、往々にして別の偏見、例えばある国民の他の国民に対する偏見などを無意識に「学び」長い間それをひきずってしまう可能性があることを、英語を学び、かつ教える立場にある者として、少し意識しておいた方が良いでしょう。

ある国の言語を習得する際、その言語で語られるジョークがわかるようになると一人前である、というようなことがよく言われる。笑いを通じて文化の相違を確認するという意図もあってか、英語教育の中にジョークを取り入れる試みは積極的になされているようである。

笑いの本質ほど、複雑で多岐にわたり、捉えにくいものはないが、ここでは、「嘲笑」を誘う笑い話、あるグループの人間が自分たちとは異なるグループに属する人間を笑い物にするというジョークのパターンの検討から始めてみたいと思う。

資料Aは、L.A.Hillが編集し、オクスフォード大学出版局から出版されている英語テキ

スト、*Steps to Understanding*シリーズの一冊に収録されているものである。Hillの外国人向け学習テキストは、授業の副読本などとして日本でもよく使用されている。このシリーズには入門、初級、中級、上級という4つのレベルが設定してあって、それぞれ、750語、1000語、1500語、2075語の語彙の範囲で物語が語られているため、学習者の能力によって、テキストを選ぶことができる。この物語は中級レベルのテキストから引用したもので、'priest'という一語を除き、1500語の範囲内で書かれている。

資料A

Pat came over from Ireland to England with his wife one year to find work. He got quite a good job with a building company, and as he did not drink or smoke, he saved up quite a lot of money.

His wife's parents were still in Ireland, and one day she got a telegram to say that her mother was ill, so Pat gave her some money and she went to Ireland to see her.

After a week, Pat wanted to write a letter to her, but he could not read or write very well, so he went to his priest and asked him to do it for him. Pat told the priest what he wanted to say, and the priest wrote it down. After a few minutes Pat stopped, and the priest said, 'Do you want to say any more?'

'Only, "Please excuse the bad writing and spelling",' Pat said. (Hill, p.32)

一人のアイランド人パットという男が妻を連れてイギリスに出稼ぎにやって来る。パットという名前は、アイランドの守護聖人、聖パトリックにちなんだ名前、アイランド人の代表的な名前である。母親が故郷で病気になったため、妻は帰国するが、その妻宛てに、パットは手紙を書こうとする。読み書きがあまり得意ではないパットは、神父に代筆してもらう。この笑い話のオチにあたる部分で、パットは手紙をしめくくる時に、自分が書いた手紙ではないのに、「乱筆乱文をお許し下さい」という意味のことを神父に書かせようとする。ここでは、自分で手紙を書いたときと、教養ある神父に代筆を頼んだときの区別もつかない、愚かなアイランド人パットが笑いのターゲットとなっている。

この物語の中でははっきりとは見えていないが、パットを笑っているのは誰だろうか。「アイランド人は愚かな国民である」というメッセージを流し続けているのは何者なのか。ここでも、植民地アイランドに対する、元宗主国としてのイギリスの意識が見え隠れしている。イギリス人がアイランド人を自分たちより劣った国民であると見なすようになった起源は、12世紀にノルマン系の領主がアイランドに侵攻した時に遡ることができると言われている。チューダー時代以降、イギリスのアイランド侵略はますます盛んになっていくが、その侵略を正当化したのが、この「劣等なアイランド人を優等なイギリス人が指導しなければならない」というご都合主義による「使命感」だったというわけである。このアイランド人に対する偏見は、'Irish Bull'、すなわちアイランドジョークという形で定着していった。アイランドジョークを支えているのは、イギリスは、文化的にも人種的にも単一民族――いわゆるWASP、白人のアングロサクソンのプロテスタ

ントーによって構成されている国であり、このWASPは、他の民族より優れているという信仰である。

このようなアイルランド人に対する偏見は1969年、北アイルランドでの紛争が激化して以来、マスメディアという媒体を通じて再びさかんに喧伝されるようになってきたことを、イギリスの女性ジャーナリスト、リズ・カーティスが指摘している。「政治家やメディアは、北の紛争の責任がイギリスにあることを認めようとしなかった。そのかわりにイギリスは無関係な第三者であり、アイルランド人は非論理的で生まれつき乱暴な国民であるということをさかんに述べたのでたのである。」(Curtis, p.4) この頃から、アイルランド人を馬鹿にするファンシーグッズの類、例えば、アイルランド国花シャムロックの模様が印刷され把手が内側に付いているようなマグ・カップや、アイルランド・ジョーク集などが大量に売り出された。その一例が資料Bとして引用したものである。

資料B

THE IRISHMAN'S LETTER

Dear Ould Friend,

Oive forgotten your address, so
if ye don't recave this letter let me know.

If ye don't let me know I'll
know ye've got it. Oi'll see ye
in the ould place on Sunday

If oim there first oill put a chalk
mark on the wall, if ye're there first
rub it out. It's so long since oi saw yer oive forgotten
what ye're like but ye're face is wew before me. I very time
oi feed the pigs oi think of ye an the last bite we had
together. Excuse spellin this is a divel of a pen

Yours to the bone. -Patrick.



これは、北アイルランドで観光客のみやげ物として売られていた絵はがきで、ここに登場するアイルランド人も、やはり守護聖人にちなんでパトリックである。パトリックの書く英語の綴りは間違いだらけで、しかもその内容は、住所を忘れてしまったので、この手紙が届かなければ知らせてくれ、もし知らせがなければ手紙は届いたと思うとか、日曜日にいつもの場所で会おう、自分が先に着いたらチョークで印をしておく、君が先に着いたらチョークの印を消しておいてくれ、などといった具合に馬鹿馬鹿しいものである。この非論理性ゆえに、読者(観光客)はパトリックを嘲笑する。手紙は「綴りの間違いを許されたし、これはペンの悪魔の野郎の仕業」という表現で締めくくられているが、この手紙の意図する笑いと資料Aが意図する笑いは同質のものである。アイルランド人を笑い物にしようという意図が一つの文化として厳然と存在しており、さらに、それが観光絵はがきとして商品化されてきている。このような「文化」が外国人向けのテキストの中に紛れ込んだ例が、資料Aである。

次に引用した資料Cは、高校一年生用の英語の教科書に収録されているものである。

資料C

Two young men were on a flight from America to Ireland. The captain's voice came over the loudspeaker.

"Ladies and gentlemen, if you look out of the window on the left-hand side, you'll see that one of our engines has stopped working. Don't worry. We can reach Ireland with three engines. The plane will arrive one hour late."

Half an hour later, the captain spoke again. "If you look out of the window on the right-hand side, you'll see that another engine has stopped. Don't worry. We can reach Ireland with two engines. The plane will arrive two hours late."

One hour later, he spoke again: "Another engine has stopped. Don't worry. We can reach Ireland on one engine. The plane will arrive four hours late."

One of the young men turned to the other and said: "I hope the other engine doesn't stop."

"Why?" asked his friend.

"Because if it does, we'll be up here all night."

(*Pioneer English I*, p.46)

二人の青年が空路アイルランドに向かっている。飛行機の4つのエンジンが順番に一つ一つ故障していくが、故障が一つ増える度に到着予定時間が遅れることが機長によって報告される。3つ目のエンジンが故障し、到着が4時間遅れることが伝えられると、青年の一人が「最後のエンジンが故障しなければいい」と友人に言う。「何故か」と理由を問う友人も友人であるが、彼の答えはふるっていて、もし故障したら一晩中空の上にはいないといけないから、と言うのである。

この教科書の編者の一人から直接聞いたことであるが、この教科書ではもともと 'Two Irishmen' という表現が使われていたようだ。しかし、アイルランド人に対する侮蔑的な表現を教科書に採用することは相応しくないという編者の判断により、ここに引用したような 'Two young men' と書き換えられたということである。確かに、「アイルランド人」という表現は消えることになったが、それでも、この二人の若者が目指している目的地はアイルランドであり、直接にはないが、この若者たちがアイルランド人であることは充分読み取れる。資料A、Bに見られる、愚かなアイルランド人を嘲笑う態度が文部省検定の教科書にまで紛れ込んだ一例である。

資料Aに示したテキストは、数年前にある大学で再履修の授業で用いたものである。再履修クラスということで、英語があまり得意でない学生が受講生の多数を占めていたが、同時に基本的に英語の理解力はあるながら、何らかの事情で前年度の単位を落とした学生も混じっていた。テキストが英語が苦手な学生に照準を合わせた選定されたため、英語が得意な学生はやや物足りなさを感じているようだった。こうした教室事情の中で、パットの物語を扱ったとき、学生たちにある問いを発してみた。この話は確かに笑い話としておかしくなくはない。しかし、誰が誰を笑っているのだろうか。そして、わたしたち日本人

読者が一緒になってこの話を笑うということにはどのような意味があるのだろうか、というのがその問いである。わたしたちは、ある民族が他の民族より優れている、または劣っているとみなす考え方に全く根拠が無いということを知っているが、それならば、なぜこのようなアイルランド人のイメージがジョークとして定着しているのだろうか。

授業では資料Bも同時に配布した。その背景にある何世紀にもわたるアイルランドとイギリスの関係の歴史を考えただけで、イギリス人がアイルランド人を嘲笑するような笑いの構造に、わたしたち日本人が、無批判に巻き込まれてしまってよいものか、というような視点に、英語が得意な学生も、そうでない学生も意外なほど興味を示してきた。

今回のこの報告の目的は、ある種の人種偏見、人種差別を題材にした教材が不適切であるとして、それらを狩り出し、糾弾し、排除することにあるのではない。もちろん、そのような文章が無批判にテキストに収録されること自体が良いことだとは決して思わないが、人種偏見というものがある限り、そのような偏見が潜む記述を批判的に読む態度を身につけることにこそ意味があると思う。学生たちは、教科書に書かれていることは「絶対的真実」であると思込む傾向がある。しかし、資料Aのように、明らかな偏見が読み取れる文を読むことで、誰かが何かについて書いた文章に「絶対的真実」などというものではなくて、その文章の中には書き手の主観が必ず入っているということを確認できるよい機会になる。偏った内容をもつテキストは、用い方によっては、ある国と国との歴史的關係を知り、その偏見の背後に潜む国民感情を理解する有益な教材となりうるのである。

今度は少し違った角度から、英語表現に見られるアイルランド人に対する偏見を検討してみたい。アイルランド人を嘲笑することによって成立する英語表現は、「俗語辞典」で 'Irish' や 'Paddy' の項目を引くと、次々と例があげられている。例えば、'weep Irish' は「嘘泣きをすること」、'Irish mile' は 'A mile plus'、つまり「実際の距離より一マイル長いこと、水増しすること」、'Paddy's hurricane' は「屈」を示す。'get one's Irish up' は「怒りを覚えること」、'Irish wedding' とは「汚水溜めを空にすること」、'to have danced at an Irish Wedding' は「喧嘩して、目を真っ黒にすること」を示している。さまざまな含みがあるが、大抵はアイルランド人は、愚かで、乱暴で、大袈裟な嘘つきといったイメージに結び付けられている。

このような表現は、'Irish' や 'Paddy' という表現が混じっているため、不用意に使用しないように気をつけることは比較的簡単である。上に挙げた例は、英語学習者にとって非常に使い勝手のよい『コウビルド英語辞典』には項目として採用されていない。

これに対し、資料Dに示した3つの例は、いずれも『コウビルド英語辞典』から採ったものである。これらはアイルランド人に対する偏見に基づいた英語表現が、巧妙に「スタンダードな」英語表現として定着してしまった例だといえる。

資料D-1: mickey ˈmɪki/. If you take the mickey out of someone, you make fun of them, either in a friendly or an unkind way; an informal expression. EG Mustn't take the mickey out of George... You're always taking the mickey.

PHR: VB
INFLECTS: IF
PREP THEN OUT
of
I tease

'Mickey' という名前は 'Paddy' と同様、アイルランド人を表すもので、「誰かを笑い物

にする」という表現の中に、アイルランド人に対する嘲りが組み込まれてしまっている。

資料D-2: 5 If you say that something is beyond the pale, you PHR: USED AS AN
mean that it is not considered to be acceptable. EG ↑ unacceptable
John's behaviour is beyond the pale!

'pale'という語には本来「境界」という意味があり、歴史上 'the Pale' は、イギリス国王が直接統治できたダブリン周辺の地域を指している。つまり、「境界」を越えるということは、「文明の外側」に行くことであり、それが転じて「社会的に受入れられない」という意味を持つようになる。

資料D-3: hooligan /hu:lɪgən/, hooligans. A hooligan is a N COUNT: ALSO
young person who behaves in a noisy and violent VOC
way in public places, usually with a group of other ↑ youth
similar people; used showing disapproval. = yob
hooliganism /hu:lɪgənɪzəm/ is the behaviour and N UNCOUNT
actions of hooligans. EG ...an increase in football = rowdiness
hooliganism.

「ごろつき」を意味する 'hooligan' という語は、ロンドンに住んでいた 'Houlihan' という名のアイルランド系の無頼の一族の名前に由来している。'Houlihan' という姓はアイルランド特有のもので、Catherine ni Houlihan という女性がアイルランドの象徴とみなされることもあるほどである。

資料Dの三つの例は、いずれもその本来の意味や、歴史的背景が見えなくなっている。英語は常に、強者、征服者の言語だった。英語という言語の中に、その元々の使い手だった、イギリス人のそして後にはアメリカ人の強者の論理、征服者の論理が、ある時は潜在的に、ある時は顕在的に組み込まれていることを私たちはつい忘れがちである。言葉を使うということはそれ自体が主観的な行為であり、決して中立的で、ニュートラルな行為ではありえないことを、限られた例を通して確認してきたわけであるが、私たちが、英語という言語を学ぶときに、往々にして、この強者の理論を無意識に取り入れてしまう危険性があることを自覚する必要があるのではないだろうか。英語を学ぶことと、偽のイギリス人、または偽のアメリカ人になろうとすることとの間に、はっきりと線を引くことの必要性を実感することができたのは、学生たちとともに、これらの教材を読む機会があったからだと思う。

参考文献

Collins COBUILD English Language Dictionary, Collins, 1987.

Curtiz, Liz, *Nothing But the Same Old Story: The Roots of Anti-Irish Racism*, Information on Ireland, 1985.

Hill, L.A., *Intermediate Steps to Understanding*, Oxford U.P., 1980.

Pioneer English I, Kaitakusha, 1987.